

ラオスの農業 (4)

藤原昇

その他に、病気とは別に、有毒な、または危険な動物等もかなり多くみられるのである。主なものをあげてみると、ハブ(台湾ハブに類似した猛毒のハブ)、コブラ(まれにキングコブラがみられる)、サソリ、などであるが、その他に多くみられるものとしては、ニシキヘビ(体長三―五尺のものもある)、グリーンズネイク、土ヘビ(別名百歩ヘビといい、かまれてから百歩あるうちに死亡するという意味で、このヘビは土中に住み、長さ十二―十三尺の淡青色でミミズの如き形をしていて、ヘビとはとても思えない代物である)、大ムカデ(長さ十五―二十尺で体幅三尺位の大きいものである)などが危険な動物である。特に筆者は二年間、ヴィエンチャン郊外の畜産試験場の場長公舎の一角に場長一家と共に生活したので、ラオスの原住民の生活もみだし、そのような生活もして来たので、これらの動物には何回となくお目にかかる事が出来たのである。特に印象的で、忘れることが出来ないのはコブラである。これの吐く毒液には、今更の如く、身の毛がよだつ思いがするのである。

もたげたかま首で、口から吐くつばき(毒液)はパツ!と飛ぶと軽く天井にも届くほどの鋭いもので、その液が目に入ると終生の盲人となる由で、全く恐ろしいものである。人間を恐れず、立ち向って来る様は正に毒蛇の貫禄十分である。

またある時は湿った土地を耕していながら、フツ!とみて青いミミズと間違えて、土ヘビを、あやうく手にする所だった時な

ど本当に冷汗ものであった。その他様々の恐ろしい思い出が昨日の如く頭に浮かんでくるのである。夜など何度かサソリをふみそこなったことがある。ある時は、部屋の一角にマムシ(猛毒)をみて、思わず悲鳴をあげたこと、など、様々な経験をしたものであるが、二年間も生活していると、矢張り、そこには生活の知恵があり、自然に現地の生活になれて来るものであり、それなりに生活をエンジョイする事も出来るようになって来る。

しかし熱帯において生じる様々な病気の問題等も色々の因子が重なり合って起るものであり、特に風土病に罹ると全く治療の方法もなく、原因もつかめず困ってしまう場合が多いのである。

従って、熱帯地方での生活において、最も注意すべき事は自分の日頃のコンディションを確実に知る事と、更に、病は気からという諺の如く、常なる精神衛生状態をベストに保つことであるように思う。

それによって事業(仕事)の効果も倍増して来るのである。日常生活における衛生状態、病気(熱帯地方の)についての知識、更には自分のいる地方の衛生地理について調査し、対策を考え、仕事と休養との区別を確実に認識し、精神衛生の必要を忘れてはならず、身心の健康に注意し、仕事の効果をあげることである。

最後になりましたが、私の専門である畜産について少し詳しくのべてみたいと思

(二) 畜産行政

ラオスの畜産は、ラオス経済省獣医局と呼ばれ、農業省、土木省等と同じく、全て経済省の下にあり、局長はDr、シンハラで、フランスに七年留学し学位を取った若冠三十九才の秀才であり、三十一才の時に州知事を歴任したという名門の出である。日本へも一九六四年に研修に来たこともあり、実兄が一九六八年九月まで在日ラオス大使であったために度々来日している。

獣医畜産局は彼を中心に活動し、地方には、その支所がある。即ちラオスには十六の州があり、他に主要都市にも支所があり、そこには若き獣医師連中が三―四名配属されており、その地方の畜産、獣医関係の指導に当たっている。更に郡、村にも日本で見られる家畜保健所または家畜共済組合的な立場で、その指導、診療の業務に当たっているのであるが、ラオスにも獣医師が



ドンブック畜試の豚舎

少なく手不足の様である。

一方、予算面については余り詳しい事にふれることは出来ないが、全て（資金、物資両面において）米国からの援助によって賄われており（これについては、ラオス全部の予算が米国に依存しているようであるが）十分なる予算はなく、機具、資材も十分ではなく、研究開発、行政的運営も困難を極めているのが実情のようである。

年間一、七〇〇万キップの予算で賄われているのであるから、職場のサラリーもかなり低い所にある。一九六四年には日本からの援助で多くの獣医畜産関係の器具機材が贈与されたが余り有効に活用されていなのが現状である。一九六六年十月より米国からの援助がかなり大幅にストップしたために畜産局関係でもかなり多くの獣医技術者が退職を余儀なくされ、兵役にとられたのである。同時に残った技師連中も全員が三ヶ月間の兵隊訓練を受けたのである。

現在、ラオスの官庁の組織は全て軍隊組織をなしており、服装も（正服は）それを象徴しており、一見して判るようになっていいる。従って階級によって位置され、非常事態の場合には、いつでも隊編成が出来る仕組みになっているのである。パテト・ラオとの内戦が終わらない限り、畜産も躍進は余り期待出来ないようである。それはラオス国内の冷涼な、地味の豊かな所は全部パテト・ラオの陣地になっているのである。矢張り、ここでも期待するのは平和である。

(三) 試験研究機関

ラオスには現在三つの大きな試験研究機関がある。

(1) 獣医畜産局実験所

ヴィエンチャンの獣医畜産局本部内に設けられており、主として鶏の育種、飼養試験を行なっている。同時に研究室では家畜（外来）の診断、ワクチンの製造実験等の仕事も並行して行なっている。ここでは毎年一―二回、講習会を開催して、地方の若い獣医の連中の再教育を実施しているし、またここで九月―十月の講習を受けて、獣医技術者の卵として地方に飛び、その地方の指導業務に係わるのである。

主な研究室としては、基礎実験室、養鶏研究室、診療室、地域開発研究室、動物実験室、ワクチン製造室、薬剤室等があり、それぞれが独自に開発を進めているようである。



ラオス土産豚

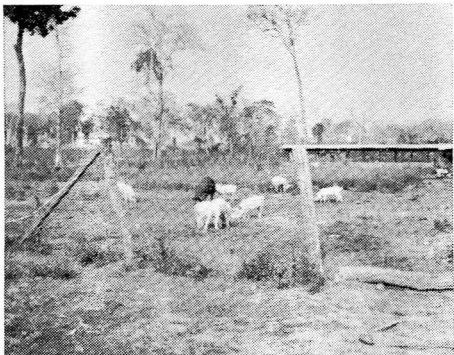
(2) ドンドック畜産試験場

ここが筆者の勤務した試験場である。主として、豚、アヒル、ガチョウ、鶏の飼育試験を中心に、その他飼料作物の育成、及び豚の育種を進めている。約50エーカーの土地であるが、まだまだ十分に利用されているとは言えず、部分的に活用されているにすぎない。

飼育されている豚の品種はラージホワイト、パークシャー、デューロックジャージー、ラオス土産豚の純粋種と、それらのF₁で、現在八十頭余りの種豚が飼育されている。

職員は場長以下、若い獣医師二名、獣医看護婦一名、牧夫一名、と筆者の六名で、その主要業務に当って来たのである。

畜産局長より、私に最初に言われた仕事は「ラオスに適する豚の品種の育種」であった。二年間、この問題を中心に研究調査を進めて来たが、その結果として少しばかりの傾向を示すことは出来たが、結論を示すに至らなかつたのは残念であるが、今後



ドンドック畜試放牧養豚風景

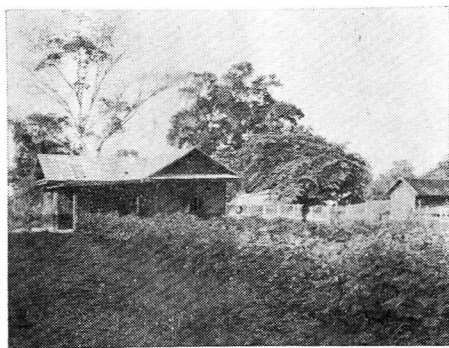
すに至らなかつたのは残念であるが、今後に役立つ何かを示唆するものと考えている。飼料作物の研究も併せて進めて来たが、これらの問題については後で述べてみたいと思う。

(3) サバナケット養鶏試験場

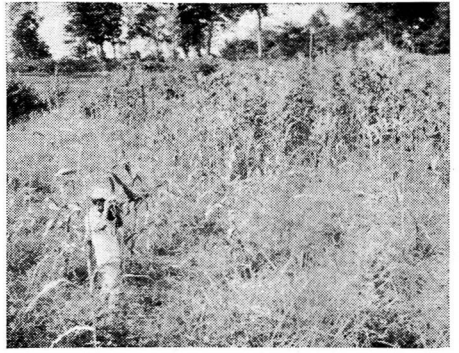
これは南部ラオスの主要都市の一つであるサバナケットにある。鶏の飼養試験を中心に進めている。約三〇エーカーの面積があり、目下の所、飼料作物と鶏の飼育試験を行なっている。

特にトウモロコシの育種を行ない、オーストラリア産のトウモロコシとタイ国産のものを交雑すると草丈二・五呎―三・〇呎位のものが生産されるのである。

今後は鶏、アヒル、ガチョウ等の家禽類を中心に研究体制を確立すべく張切っているようである。スタッフは少なく、場長以下技師（獣医技師）二名、牧夫二名、日本人一名で運営している。



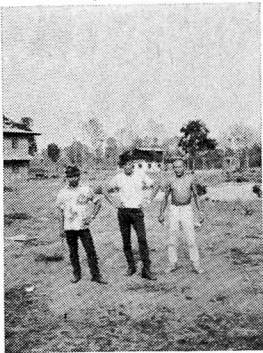
サバナケット養鶏試験場大豆試験中



サルバナケット試験場 F₁ トウモロコシ

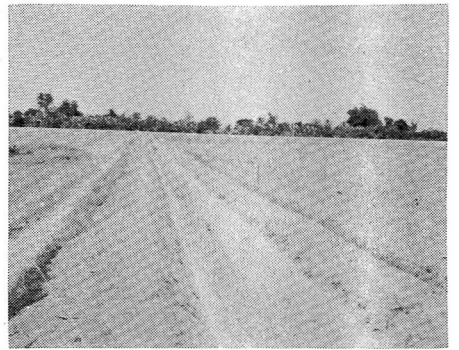
更に軌道にのれば、将来は豚をも導入し、育種、飼育試験を行ない、南部ラオスの畜産発展に寄与すべく目下計画を進めている。

これらが大体、現在ラオスで活動している畜産獣医関係の試験研究機関の代表的な



ドンドックの獣医師

ものであるが、その他に以前はシアンクワンという大草原の町（現在パテト・ラオの中心地）に米国の援助によって出来た養牛（酪農）試験場があったが、内戦のために活動を中止しているようである。



イスラエル援助によるハドケオ農学校農場

更に南部ラオスの高原（標高一、二〇〇）地帯（ポロベン高原という）にはかつて、仏人経営による酪農試験場があったが、現在は活動していない。

しかし畜産局長の話によると、次期は、ポロベン高原に養牛試験場を設立する心算にある由で計画中の様である。ラオスにはまだ牛（含乳牛）の関係試験機関はみられず、隣国のタイには既に、デンマーク、ドイツ、アメリカ等の先進国の援助による酪農試験場がいくつもあり、近代的ミルクプラントを持ち乍ら、かなりの市乳生産を行なっており、それに反してラオスでは乳牛も稀にみられるにすぎないのである。

東南アジア第二の避暑地と言われているポロベン高原をもちながら、有効に活用出来ない現状を考える時、何か割り切れないものがある。イデオロギー云々は別にして、後進国と自他共に認めながら、その根本原因たるものを解決し、民族が団結し、独

立と進歩にチャレンジするだけの何かを彼等に期待したい！それがわれわれの偽わらざる心境である。

(三) ラオスの畜産一般

○頭数及び品種

ラオスの畜産は前述した如く、国の産業の中で極めて重要な部分を占めており、前表に示した如く、年々頭数が著しい増加の傾向を示している。仏教国（小乗仏教）であるにもかかわらず、肉の食用に供する割合は多く、動物性蛋白質の補給は我々が想像した以上に多く、むしろ吾々が日本にいる時よりも、肉を口にすることは、むしろ多いようである。

頭数についてみると、前述した如く（表示）であり、殆んどの農家が一〜二頭の水牛か畜牛、又は豚・鶏を飼育しているのである。それは彼等の口に直接はいるのではなくて、一度市場へ運び、売ってしまつて現金に替えてから、肉を求めているのである。やはり一番多く飼育されているのは鶏とアヒル、ガチョウであり、これらは自然交配によって増殖し、熱帯故に温度の心配もなく放任のままでも年間に著しい羽数の増加をみるのである。

又、ラオス（広く東南アジア全土）には多くの象が家畜化されて飼育されており、材木の運搬に大役を果しているようである。しかも象を屠殺することは国法によって禁止されており、山奥に住む原地人の重要な農具の一つである。

(以下次号)

雪印特用

各種球根セット御案内

チネーリッパ組物	一組	五〇〇円
五種各色	二〇球	一組 五〇〇円
チネーリッパ組物	二〇球	一組 五〇〇円
色別	二〇球	一組 五〇〇円
珍花チネーリッパ	一〇球	一組 五〇〇円
三種	一〇球	一組 五〇〇円
水仙	組物	
優良混合	一〇球	一組 四五〇円
クロッカス	組物	
色別	一〇球	一組 一五〇円
ヒヤシンス	三球	一組 三五〇円
花壇用徳用セット		
チネーリッパ	一〇球	一〇球
クロッカス	一〇球	一〇球
水仙	一〇球	九五〇円
ヒヤシンス	二球	二球
切花用徳用セット（本セットのみ発送は十月）		
チネーリッパ	一〇球	一〇球
鉄砲百合	一〇球	一〇球
水仙	一〇球	九五〇円
アイリス	一〇球	一〇球

